

## パイデイア（そのIX）

——ギリシア文化を彩る理想の数々——

### 僭主たちの文化政策

貴族的な詩を研究して、われわれは、その詩がまだ輝きを放っていた前五世紀へと導かれたが、実のところ、これに先立って一つの段階が存在した。すなわち、貴族の支配（＝貴族政）と民衆の支配（＝民主政）の間に介在する中間段階で、これこそは「僭主政」にほかならない。ここにいる僭主政は、ギリシア国家の発展の中でも、さらには文化史の中でも等しく重要な現象であったから、以前にもそれなりに言及されたが、今や、もっと長く論じてみなくてはならない。

シケリアにおける僭主たち——その内の二人に、ピンダロスは雄大な頌詩を捧げている——の支配は、トゥキュディデスも理解していたように、通常のギリシアの僭主政とは、似て非なるものであった。ヘレニズム世界の西方植民地では、カルタゴのいや増す海軍力や通商力を見せつけられていた事情も手伝って、独裁政治が、その他のギリシアの地より遙かに長く生き残ったけれども、ヘラスでは、政治史上のこの時期は、アテナイにおける前五一〇年のペイシストラトス一門の崩壊によって幕を閉じた。シケリアの地に僭主政をもたらしたのは、ギリシア本土やその東方植民地でこれを生み出さないわけにはいかなかった社会過程とま

一四

G・ハイエツト  
村島義彦 訳

るきり異なった諸状況であった。僭主政そのものは、実のところ、一方における貴族支配の崩壊と他方における大衆の勃興と軌を一にしていたが、シケリアのそれは、アクラガス、ゲラ、シユラクサといった強力なシケリア都市がせつせと押し進めた「商業的帝国主義」の軍事・外交的な現われにほかならない。もつとのちの、およそ半世紀後の民主政の時代にさえ、シケリアの置かれた状況は、避けがたい道筋に沿ってディオニシオスの僭主政を生み出した。プラトンは、この僭主政を「歴史的に妥当なもの」と考えたが、それは、これ自体が「避けられない必然」に属したからにほかならない。

ここで時間を戻して、ギリシア本土に僭主政の出現する「機」も熟した前六世紀の中葉に、アテナイと、イストモスの豊かな諸都市がいかにあったか、を考察してみよう。アテナイの方は、まさしく、僭主政に向けた動きの最終段階に差し掛かっていた。ソロンは、長きにわたって僭主政の到来を予言してきたが、晩年期の詩では、これが「指呼の間に迫っている」と口にし、ついには、それが「事実となる」のを生きて目にしたのである。かれは、アテナイの貴族の出であったが、みずからの階級の伝統に別れを告げていた。かれの詩にそつと仄めかされ、かれの法律にその輪郭が示され、かれの生活にしっかりと具体化されていたのは、

ほかでもない「人間性」という新たな理想であつて、出自や財産などの従来の特権は、これの達成に何らの関わりも持たなかつた。とはいえソロンは、アッテイカの虐げられた労働者たちに向けて「正義」を要求したとき、世にいう「民主政」——かれはのちに、これの創設者として称えられた——などを心に描いてはいなかつた。かれが望んだのは、旧来の貴族政国家を、道徳的にも経済的にも「まっとう」にすることではなく、ゆえに最初は、これの没落が間近かに迫っているなど想像もしなかつたが、貴族たちはしかし、歴史から何ひとつ学んでおらず、ソロンから学ぼうとしなかつた。そのかれが公務から身を引いたのち、党派抗争は、激しさも新たに再び勃発した。

これに続く数十年の歴史は、何ひとつ知られていないが、アリストテレスはしかし、アルコン（執政官）のリストを手掛かりに、アテナイの統治が、数回にわたつて深刻にかき乱されたにちがいない点をしっかりと見て取つた。当のリストに基づくなら、完全にアルコンを欠いた期間が数年は続いたように思われたし、或るアルコンなど——一年任期にもかかわらず——二年に及んで公務を続けたいわけにはいかなかつたらしいからである。アテナイには、わけても強力な家系を頭に仰ぐ三つの党派があつた。すなわち、沿岸部の貴族たちのそれ（＝海岸党）、内陸部の貴族たちのそれ（＝平野党）、アッテイカの貧しい高地部——の貴族たちのそれ（＝山地党）だが、これらの三党派はいずれも、民衆の支持をせつせと求めた。民衆は、みずからの深い不満を声高に訴えてくれる正規のリーダーを擁した組織的党派ではなかつたが——あるいは、なかつたからこそ——今や、政治の舞台の重要因子となりつつあつたからである。ディアクレイアの貴族たちの頭を務めたペイシストラトスは、巧みな駆け引きに訴えて、ライバルの政敵連中を——そのうちの何人かは、アルクマイオン派のように、富と権力ではるかに当人を凌駕

していたにもかかわらず——不利な立場に追い込んだ。かれは、民衆の支持を確かなものにし、ライバルたちの要求にも気前よく譲歩した。そしてかれは、権力をわがものとする企てに何度も失敗しながら、また、亡命の期間も交互に差し挟みながら、ようやく身を立てることに成功した。その際にかれを支えたのは、兵士のように槍で武装した護衛でなく、棍棒で武装した連中であつた。このようにして築き上げられた権力は、長い統治を介して強化され、ゆえにかれの息子たちは、父親の死後、さしたる騒動もなくこれを引き継ぐことができた。

僭主政そのものは、歴史的現象としても、さらには、遠大な文化革命——貴族階層が没落して中産階層が政治的に興隆する中で、前六世紀に開始された——の背後にあつてこれを動かした力としても、ともに重要きわまりない。その典型的実例として、われわれは、アテナイの僭主政をかなり詳しく吟味してみるとしよう。これについては、その他の場合よりもよく知られていたからである。とはいえ最初はず、アテナイに先立つてある、その他のギリシア国家における僭主政の発展を具体的に眺めてみなくてはならない。

僭主政が敷かれていた都市の大半において、われわれが知っているのは、僭主の名前とか、為された若干の注目すべき活動などではない。僭主政はどのようなプロセスをへて勃興したか、また、そのような勃興を促したのは何であつたか——これらについては、ほとんど知られていないのである。しかも、僭主のリアルな個性とか、その支配の特性などは、さらにもっと知られていない。ただし、あまねくギリシアの国家は、前七世紀に——あるいはそれ以後に——この種の統治（＝僭主政）へと一斉に舵を切つて、この驚くべき「右へ做え」から示唆されるのは、僭主政を現出させた原因がいつでも同じ、ということではないだろうか。前六世紀については、われわれを導いてくれる事実もいっそう多く

知られていたもので、それらに依拠して眺めるなら、僭主政の勃興が、大々的な社会・経済的変動——主としてソロンやテオグニスの作品から知られる——の一部であった点に思いが及ぶにちがいない。広大な土地を領有する貴族階級は、それまで、どの国家でもこの上ない権力を誇っていたのに、今や、そのような地位も「風前の灯」であることに気が付いた。物々交換という古い仕組みに替わって、貨幣が、新たな交換手段として流通しただしからである。かれらは、時代遅れの経済技術に縋り付いていたため、通商と産業から得られた「新たな富」の所有者たちの手で、大々的に背後へと追いやられるはかはなかった。もつとも、古い家系の中には、通商にも方向を転じて新たな富の獲得に成功した者もいたから、そのような連中とそうでない連中の差はさらに開いて、等級の方も、大きく二つに分かれることになった。テオグニスも示すように、ひたすら貧しくなって、もはや自身の社会的地位も保ちえない貴族たちが一方には数多くいたかと思うと、他方には、アッティカのアルクマイオン一門のように、さらに富を貯め込んだ結果、その権力が同胞の貴族たちには耐えがたいものとなって、当人たちもまた、政治権力を手にしようとする誘惑に抗せなくなった類いの貴族たちがいた。破産した小作農や借地農民たちは、過酷な法令のおかげで、実質的には地主の「農奴」となるはかはなかったから、農業に従事する労働者たちは革命を促す思想へと駆り立てられ、不満を抱く貴族たちは、それゆえ、組織されない大衆の「長」に収まることで容易に権力を手にすることができた。ところで、新興富裕層は、地主貴族の側についたものの、決して快く迎え入れられたわけではなかったし——貴族は、億万長者の商人に共感を覚えなかった——、かれらを介してもたらされた強さの増大ですら、まことにあやふやな獲得品でしかなかった。というのも貴族たちは、富裕層に加入されて、土地も金銭もほとんどない大衆からかつて以上にその身を遠ざける

ことになり、それゆえ状況は、今や、富める者と貧しい者の単純な闘争へと狭まって、革命は、はるかに近いものとなったからである。僭主政の勃興は、庶民たちがリーダーを欠いたおかげで、貴族階級の威圧を払いのけることができなかつたという、そして、これを払いのけた際にも、みずからのリーダー——今は「僭主」と化した——の支配を甘んじて受け入れるのが常であった、という事実に助けられていた。庶民は、何世紀にも互つてみずからの主人に忠誠を尽くした結果、「自由な民衆とはみずからを支配する者のことをいう」といった理想など、いまだに思いつけないでいた。かれらは、当時もこのような理想を実現できなかったが、これは、偉大な扇動家たち（ソフィスト）の時代にあつてもそうであつた。実のところ、これらの扇動家が姿を消したのちの時代にさえ、この理想はやはり実現されなかつたのである。アリストテレスは『アテナイ人の国制』で、このようなリーダーの連続的登場こそはアテナイ民主政の歴史にちがいない、と捉えているが、まさに「正鵠を射たもの」と評されてよいのではないだろうか。

僭主政の登場は、ギリシア本土においても、イオニアの諸都市やエーゲ海の島々においても、その時期を同じくしていたように思われる。後者にみられる知的・政治的な発展段階は、前者よりもよほど高次であつたから、僭主政の方も、もつと前に登場してもよかつたのに・・・と思われなくもなければいけぬ。前六〇〇年ごろに、ミレトス、エペソス、レスボス、サモスはすべからく高名な僭主たちの手で支配され、かれらは一般に、ギリシア本土の同胞僭主たちと緊密な関係をしっかりと保持していた。かれらの手に権力が握られたのは、もっぱら内乱を介してであつたけれども——あるいは、まさしくそうであつたがゆえに——僭主たちは、国際的な結束の絆で互いに連携し、こうした連携はしばしば、王朝同士の婚姻でしっかりと強化された。かれらは、実のところ、前五世紀

に広く目にされた民主派や寡頭派の結束を先取りしていたといつてよい。そうしたわけで、自国のために先見の明に溢れた外交政策を最初に考え出して、しかも——たとえばコリントス、アテナイ、メガラのよう——さまざまな植民市を創設してこの政策を実行にまで移したのは、あるることか僭主たちであった。そのような創設地はすべからず、以前の植民市にも認められた。しがらみをはるかに超えたそれで、しっかりと首都に縛りつけられていた。たとえばシケイオンは、ヘレスポントスにおけるアテナイの端的な砦であったし、ペリアンドロスも、みずからの手で創設したポテイダイアと、その手で征服しなくてはならないコルキラに、コリントスのための同種の前哨要塞を築いたのだった。ギリシア本土に目を向けると、コリントスとシキュオンが、僭主政を展開した最初の都市として浮かび上がってくるのだが、これらを踏襲したのが、ほかならぬメガラとアテナイであった。ペイストラトスによるアテナイの僭主政は、ナクソスの専制君主に助けられて樹ち立てられ、ゆえに後者は、そのお返しとして前者の支持を得ることになった。エウボイアでも、僭主政は、きわめて早い時期に登場したが、シケリアではしかし、のちに最高の発展を示したにもかかわらず、登場そのものは遅かった。前六世紀のシケリアで唯ひとりの重要な僭主といえ、故郷のアクラガスの繁栄を導き出した立役者ともいふべきパラリスがいた。ギリシアでは、一般にペイストラトスが高く賞賛されるけれども、もっとも偉大な僭主として文句のない人物ならば、やはり、ヘラスの「七賢人」の一人でもあるコリントスのペリアンドロスを措いてないだろう。バッキス一門の貴族統治が崩れ去ったのち、ペリアンドロスの父が王朝を樹ち立て、この王朝は、数世代に及んで権力を保持しながら、ついに、ペリアンドロスにおいて頂点に達した。アテナイの将来の栄光を準備する——これが、歴史におけるペイストラトスの役割といえるだろうが、対し

てペリアンドロスは、コリントスを目下の高みにまで導いた。その都市はしかし、当人が死ぬと落ちぶれて、二度と往時の姿を取り戻すことはなかったけれども……

ギリシアの他の都市では、依然として貴族の支配が続いていた。この支配を支えていたのは、いつもと変わらず広大な土地の領有であったが、ほんのチラホラとなら、巨大な富に支えられている場合——たとえば、純然たる通商国家のアイギナなど——もないではなかった。僭主政権の継承は、せいぜい二〜三代が関の山で、ふつうは貴族階級が、手痛い学習のちみずからの政策を確かなものにした時点で途絶え果てた。貴族階級はしかし、奪還した権力をほとんど保持しないで、通常は、アテナイにみられたように一般大衆に明け渡さなくてはならなかった。ポリュビオスが、みずからの統治形態継承論でも解説しているように、僭主政が崩壊したのは、何はともあれ僭主の息子たち、ないしその孫たちが——当人よりも才能に欠けて——受け継いだ権力を維持できなかったか、はたまた、民衆から託された権力を気ままに濫用したからにほかならない。僭主政は、落剥貴族の面々には、まわりついて離れない亡霊となつて、かれらは、そのいかに恐ろしいかを民主派の面々に伝え残した。とはいえ、僭主政に対する憎悪は、政治における闘争精神が単に一面的に現われ出たものにすぎなかった。ブルクハルトも適切に語っているように、いかなるギリシア人の心にも、隠れた僭主が潜んでいたからである。僭主であることは、広く一般に受け入れられた明々白々な幸福の形態であつて、ゆえにアルキロコスも、満ち足りた大工を記述するにあたり、こう語る以上のことはできなかった、なにせ当人は、僭主となるのを切に望みもしなかったのだから……と。ギリシア人の常に感じていたところは、こうだった、一人のこの上なく有能な人物による支配は——アリストテレスの言葉を借りるなら——「自然に叶つてい

る」のだ、と。だからかれらは、そのような支配が登場したなら、黙って従うのをまるで厭わなかった。

もつと以前の僭主政は、初期ギリシアの家父長型の王政と、のちの民主政における扇動家（「ソフィスト」）たちの支配の、あくまでも中間体のごときものであった。王政における専制君主は、外的には貴族的な統治形態を主張しながら、あらゆる権威をみずからの内に、さらには、その支持者たち——小規模ながらも影響力の大きなグループ——の内にまとめ上げようとひたすら腐心した。もしも国家が、市民たちのすべて——ないしは大多数——の意思に支えられて、みずからに相応しい合法的で効果的な統治形態を造り上げないなら、そこを支配するのは、武装された少数者でしかないだろう。とはいえ、僭主の武力はいつの時代にも目について、これへの不評は、いくら時が流れても減ることはなかった。僭主はだから、そうした武力との相殺を図って、あるいは、外的に確立された官位選抜形態を注意深く主張したり、あるいは、自分という人間への忠誠を公的に組織化したり、あるいは、臣民の大多数を満足させるような経済政策を押し進めるなど、さまざまの企てに手を染めないわけにはいかなかった。ペイストラトスは、訴訟に巻き込まれると、しばしば直接に出廷して法と秩序の支配に何らの揺るぎもないことを証明したが、このことは、民衆の心に強い印象を残した。どの僭主も、古い名門貴族なら「力づく」で抑え込んだし、危険なライバルとなる恐れのない貴族たちなら直接に追放したり、あるいは、ギリシアの別の地域で遂行すべき名誉ある義務を割り当てて間接に追い払った。ゆえにペイストラトスも、ライバルのミルティアデスを支援して、遠く離れたケルソネス半島を征服して入植を図るといふ重要な事業に邁進させたのだった。そしてどの僭主も、市民団体らしきものが都市に集結するのを許さなかった。みずからの支配を危うくする組織的な力が形造られるのを恐

れたからである。経済的な理由と政治的なそれに促されて、ペイストラトスは、アッティカの田舎住民たちの肩を持つ気になり、住民の方も、そのお返しに深くかれを愛した。そのような努力が功を奏して、かれの僭主政は、何年が過ぎても依然として「クロノスの統治」とか「金の時代」などと称えられたし、当人が、個人的に田舎を訪れて朴訥な小作農たちと語り合い、慇懃な姿勢と低い課税も取り混ぜながら、その心をしつかり掌握したといった、共感を催すあまたの逸話も広く囁かれていた。かれの用いた戦術には、政治的な抜け目のなさとは健全な農業的本能が見事に混ざり合っていた。たとえばかれは、小作農の面々が、出廷のために町までの旅を強いられるという困難を取り除きましたが、それは、当人が、アッティカをめぐる旅を恒常化して巡回裁判を試みたからにはほかならない。

かれ以外の僭主の国内政策については、不幸にして、これほど詳しくは記述できない。しかも、ここにおけるペイストラトスの説明ですら、アリストテレスに依拠していて、そのかれも、アッティスの年代記に基づいてこの説明をまとめていた。ペイストラトスの仕事に経済性の強い点はとうてい見逃しがたく、それと比べるなら、かれの政治行為など、単なる一時しのぎの解決策でしかなかった。僭主政——わけでもかれ自身のもの——において本当に魅力的であったのは「収められた成功」を措いてなかったが、そのような成功はしかし、単独の人物——真の意味で才能にあふれ、治める民衆への奉仕に文句なく身を捧げた——の手になる極上の個人的支配にもつぱら負っていた。ならば、僭主ならすべからく輝く才能にあふれていたのか否か、あるいは、ひたすらに猷身的であったのか否かは、当然に疑われてよいけれども、何らかの「制度」を評するには、どうしても最上の代表例を取り上げないわけにはいかないのである。成功という点に基準を置いたなら、僭主政の時代は、急速で

価値ある「進歩」の時代といえないだろうか。

前六世紀における僭主の支配は、精神的な面では、その政治的敵対者ともいふべき偉大な立法家にして裁判官（アイスマネタイ）たちの支配と比較されてよいかもしれない。後者の面々は「期間限定の独裁官」として、多くの都市から任命されて絶大な権力を託され、永続的な改変を現行制度に導き入れたり、あるいは、紛争後の乱れた制度を回復させるなどの役割を担っていた。かれらは、立法行為を介して、市民の側での政治活動を許す——あるいは積極的に申し付けさえする——理想を生み出して、基本的には、一般的な文化の基準に影響を及ぼしたが、これに対して僭主の方は、あまねく個人々の進取の気性を抑え込んで、国家の手で遂行されてよい活動のすべてを「わが手で」促進して憚らなかつた。ゆえに僭主は、市民たちを教育して普遍妥当な政治的アレテーに向かわせなかつたとはいえ、別の意味では、しつかりとかれらの「お手本」となつた。かれは、みずからの地位にかなる責任も割り当てず、この点では、のちの世紀の政治家たちの「原型」には違ひなかつたからである。国家の統治は、手段と目標の長期的なソロバン勘定を含んだ、先見の明にあふれた全体計画の上にこそ為される——これを明示した最初の人間が、ほかでもない僭主であつた。すなわち、かれこそはリアルな「政治（ポリティックス）」に携わつた最初の人間にほかならない。僭主は、いうならば詩人や哲学者に対比されてよいのではないだろうか。前七世紀と前六世紀に新たに目覚めた個人主義が、政治生活という舞台に特徴的に現われ出したのが「前者」だとすると、これが、異なつてはいるが関連のある領域に現われ出したのが「後者」であつたからである。前四世紀には、偉大な個人々々人に向けた一般的関心がますます高まつて「伝記」という新たな文学様式を生み出したが、この様式の好んで用いた題材こそ、詩人であり、哲学者であり、僭主であつた。そして、前六世紀の初頭近くに

評判を呼んだ「七賢人」には、立法家や詩人ばかりでなく、ペリアンドロスやピッタコスといった僭主たちも含まれていた。わけても重要なのは、当時のほぼすべての詩人の活動が、僭主の宮廷を中心としていた点にちがいない。個人主義は、いまだ一般的な慣習とはならず、知性の方も、広く標準化されてはいなかった。個人主義は、依然として真の精神的自立を意味していたのである。まさにそのゆえに、数少ない自立した魂たちは、相互に支え合うためにも互いの相手を探し求めて止まなかつた。

僭主の宮廷に文化が集中したことによつて、芸術家や鑑定家の狭いサークルの中だけでなく、もつと広くその国の全体にわたつて知的で美的な生活がいつそう強まるという効果が導き出された。そうした具体例として、並み居る専制君主の中で最も輝かしい人物のみを列挙してみても、たとえば、サモスにおけるポリュクラテスの、アテナイにおけるペイシストラトス一門の、コリントスにおけるペリアンドロスの、シユラクサにおけるヒエロンの、それぞれのパトロン活動の結果が浮かび上がってくるのではないだろうか。アテナイの場合は、僭主政の細目もいつそう知られていて、それゆえ、芸術、詩、宗教に向けた僭主の関心が、アッティカの発展に及ぼした効果の実際をあますところなく評価できるだろう。僭主の宮廷は、アナクレオン、シモニデス、プラティナス、ラソス、オノマクリトスなどの仕事場そのものであつた。それは、喜劇や悲劇の、さらにはアテナイ音楽の誕生を促して、後者など、前五世紀に大いなる発展を見せることになつた。それはまた、ホメロスの朗唱を大々的に奨励して、これを、ペイシストラトスの手でまことに華々しく再編された国家的祝祭、つまりはパンアテナイ祭にしっかりと組み入れた。それはさらに、ディオニュソスの壮大な祝祭を計画し、芸術（＝文学）、彫刻、建築、絵画の磨き上げをせつせと刺激した。加えてそれは、アテ

ナイ自体を、常にそれがあつたところのもの、すなわち「ミューズの都」にした。僭主の宮廷から流れ出たのは、喜びに満ちた新たな冒険精神であり、いっそう洗練された「快の感覚」であつた。ヒッパルコスと呼ばれたペイストラトスの若い方の息子は、誤つてプラトンの作とされた対話編の中で、最初の唯美主義者として記述され、アリストテレスも、このかれを「恋愛主義者にして芸術愛好家」と呼んでいた。この朗らかで政治的にも害のない好人物が、前五一四年、暴君殺害者たちの手に掛かつて打ち倒されたのは、掛け値なしの悲劇というほかはない。かれは、生前には、多くの詩人に対する寛大なパトロン役に徹したので、そのような詩人の一人、オノマクリトスは、かれの後援に報いて、ペイストラトス王朝を支持した託宣タイプの詩を作り上げ、そうした詩のすべてを、神秘宗教への宮廷の嗜好に叶うようにオルペウスの名前でもとめたのだつた。この件はしかし、大いなるスキャンダル（＝不敬）となつて、結果として僭主たちは、この詩人を見捨てて民意の手に委ねないわけにはいなくなつた。かれは追放に処され、次にパトロンたちを目にしたのは、実に、ヒッピアスが亡命して、かれと追放の身を共にした時であつたという。

このようなスキャンダルが一つばかりあつたからといって、文学運動への王朝の支援が、それゆえに手控えられたわけではない。かれらの宮廷は、詩や芸術といった無尽の小川の「源」であつて、この小川は、何世紀にもわたつてアテナイの宴席を流れ続けた。かれらは、偉大な国家的競技における二輪戦車競走で、何とか勝利を手にしようと激しく野心を燃やして、あらゆるタイプの体育的な競い合いをひたすらに支援した。かれらは、実のところ、当時の生活における一般文化の前進を強力に刺激したのだが、その中には、こつ信じる連中もいなかったわけではない。すなわち、宗教的祝祭を大々的に展開し、あまねく芸術を広く奨励する

のは、ギリシアの僭主にみられる典型的な方策であつたが、これらも実は「巧妙な策略」でしかなく、狙いとするとところは、市民たちの落ち着かない心を「政治への問い」から逸らせ、新しいが危険性の薄い関心事へと振り向けることであつたのだ、と。そのような動機が、たとえ僭主の文化政策に何らかの役割を演じていたにしても、かれらは、みずからの仕事に心を込めて集中したから、それを見ると、むしろこつ考えていたと想像されてよいかもしれない、芸術と知性を発展に導くのは、共同体生活への本当の意味での貢献にほかならないのだ、と。双方の発展を促すのは、あくまでも民衆に向けた奉仕の一部であつて、それを介して物語られているのは、僭主が、真の「政治家（ポリテイコス）」であつた点にちがいない。かれの手で臣民たちは、みずからの都市がいかに偉大で、いかに価値ある存在なのかをいっそう深く理解できたからである。宗教と芸術への民衆の関心は、むしろ、そんなに真新しいものでもなかつたが、豊かで強力な統治者の手で組織的に磨き上げられたとき、突然に大きく膨れ上がった。文化活動に対する公的な奨励は、僭主が、どれほど一般民衆に愛情を抱いていたかを証明しているのではないだろうか。このような義務は、のちに民主政国家に引き継がれたが、後者はしかし、前者という実例に従つたにすぎない。僭主たちが流した奉仕の汗ののち、もはや国家は、組織的な文化政策を推し進めないでは存在もできなくなつた。この時期にはしかし、文化への国家の関心は、芸術の手で宗教を飾り立て、そうした芸術家を僭主の手でしっかり支援することに狭く限られていた。これらの活動は、国家を「内乱」にまで導くはずもなく、国家内での意見の衝突は、もつぱら「詩」によつて引き起こされた。詩は、かつて抒情詩人たちが僭主の宮廷でしたよりもいっそう深く、公的生活とさまざまな発想に侵入したからである。あるいはそれは、科学と哲学によつて引き起こされたが、これらはしかし、当時のアテナイには

いまだ目にされなかった。初期の僭主たちが高名な哲学者の面々を鼻屑した、などと耳にされた例しはなく、かれらはむしろ、芸術の行き渡る範囲を拡大し、その人気をいっそう高めるのに意識を集中して、民衆の美的基準や物的基準の進展にひたすら専念したのである。

しばしばそう思われたように、パトロンの組織的な支援は、ルネッサンスのあまたの専制君主によって、のちには、その他の啓蒙的な王子たちの手でも実践されて、同時代の知的生活を途方もなく刺激したのだが、そこには、どこか人為的な匂いが漂っていたし、かれらの奨励した文化もまた、貴族社会にも、かといって民衆の間にもそれほど深く根を張らないで、小さな社会の単なる贅沢な「なぐさみ」でしかなかった。忘れてならないのは、これと同種の文化が、すでにギリシアの地に登場していた点ではないだろうか。アルカイック期の終わりに出現したギリシアの僭主たちは、いうならば「最初のメデイチ家の人びと」であった。かれらもまた、余生の慰みと結びついた何もものかではなく、少数の者のみが特別に好むような生存の華としての「文化」を楽しんで、これを、完全な門外漢であった一般民衆に気前よく分け与えただけにほかならない。貴族階級の方はしかし、断じてそうはしなかった。かれらに所有されていた文化は、こうした仕方での「分け与え」に叶いそうもなかったからである。貴族階級は、権力の座から転落したのちですら、消えることのない自身の重要性を国民文化に向けて訴え続けたが、それも実に、先のような事実に基づいていたといつてよい。もともと、精神的な活動が、みずからを日常生活から切り離して、不快で騒々しい日々の街角よりは「象牙の塔」にいっそう快適な仕事場を見い出すのは、まことに自然というほかはない。偉大な芸術家や思想家たちは、有力な人士をパトロンに持つことを好んだ。シモニデスは、ペイシストラトスのサークルの最重要メンバーであったが、かれのものとされる言葉を借りるなら、

賢者ですら、富者のドアの前で待たなくてはならない、のである。ところで、さらにいっそう感覚が磨き上げられると、芸術と学問は、専門の度合いと精巧の度合いをいっそう強めて、ごく少数の目利きにのみ語りかけるようになっていく。特権意識が、芸術家とパトロンを相互に結びつけて、その結びつきは、双方が互いを嫌い合っている場合でさえ、壊れ去らないのである。

そうした点は、前六世紀の終わりのギリシアに、ピタリと当てはまるのではないだろうか。アルカイック期末の詩は、イオニアの地で知的生活が高度の発展を遂げた結果、ひたすら専門化して、現実の社会生活から距離を置くものとなった。テオグニスとピンダロスは、貴族的信条の「使徒」であったが、このような規則には当てはまらない。かれらは、みずからの時代より先に進んでいて、同時代の他の連中よりは、ペルシア戦争期のアテナイ人であるアイスキュロスにいっそう近かった、といえるだろう。一方におけるアイスキュロスと、他方におけるテオグニスやピンダロスは、異なった原理を奉じて仕事に勤しんだとはいえ、ともに、僭主の元で繁茂した専門芸術の打破をしっかりと旗印に掲げていた。かれらと専門芸術の関係は、いうならば、ヘシオドスやティルタイオスと後期の吟遊詩人たちが朗唱した叙事詩の關係に等しいかもしれない。ポリュクラテス、ペリアンドロス、さらにはペイシストラトス一門がパトロンの役割を務めた芸術家たち、すなわち、アナクレオン、イピコス、シモニデス、ラサス、プラティナスといった音楽家や詩人たち、そして、同時期の偉大な彫刻家たちは、実のところ、言葉の十全な意味における「芸術家（アーティスト）」であった。かれらは、途方もない技術の才を具えた「選ばれた面々」であって、いかなる仕事にも対処しいかなる社会にも溶け込んだが、どこにも根を下ろすことはなかった。たとえばアナクレオンは、サモスの宮廷が消滅して、保護者のポリュクラテスもペル



シア人の手で磔刑に処せられたとき、特別に派遣された五〇槽のガレー船に迎えられて、アテナイのヒッパルコスの宮廷に赴いたし、シモニデスは、ペイシストラトス一門の最後の一人がアテナイから追放されたとき、テッサリアに移住してスコパス家の王子たちの宮廷で暮らし、この滞在は、一門全体が宴会場の屋根の崩落で押しつぶされて世を去るまで続いた。シモニデスのみが唯一の生存者であった、という伝承には、どこかシンボリックなところが見受けられなくもない。かれは、八〇歳を迎えて今一度移住し、シユラクサの僭主ヒエロンの宮廷にその腰を落ち着けた。このような面々に代表される文化は、当地人たちの生活と同じく、そもそもの根を欠いていた。それは、アテナイ人のように美を愛好する人びとの集った利口な国を楽しませはしたが、かれらの魂を掻き立てるには至らなかつた。マラトンの戦いに先立つこと数年間のアテナイで、一流の面々が、香水を振りかけたイオニアの衣装や、華麗な巻き毛、黄金のバッタの髪飾りでわが身を飾ったように、アテナイという都市もまた、優美な彫刻類や、僭主たちの宮廷に出入りしたイオニア人やペロポネソス人の手になる調和的な詩でしつかりと飾り立てられた。かれらの芸術は、アテナイの空気に「美の種」を蒔いて、そこに、ギリシアのあまねく他の地方から訪れた、心を肥沃にする豊かな光を滲み込ませたのだった。アテナイの地を、偉大なアッティカの詩人（「アイスキュロス」——この国の潜在的天分を「運命の刻限に」發揮させた——が生まれ易いように「地ならし」したのは、こうした面々にほかならない。

### 訳者あとがき

ここに紹介する和訳は、W・Jaeger, PAIDEIA — Die Formung des Griechischen Menschen の英訳として有名な G・Highet, PAIDEIA — the ideals of Greek culture —, Oxford, 1939 をテキストにしている。イエーガーを和訳する際に、独文特有の圧縮性と抽象性に本気で手こずっていたわたしは、この英訳の意識性と具体性にどれほど助けられたか分からない。ハイエットの英訳は、いわゆる訳本の域を超えて、それ自体が、見事に完結した一個の読み物であった。

大学における外書講読のテキストに、たまたまこれを選んだ経緯もあって、教室での講読に合わせて、あえて和訳をパソコンに入れてみたのだが、改めて読み返してみると、独文の原典訳とは違ったストーリーの滑らかさが目に付いて、比較の意味でも、思い切って『紀要』に投稿することにした。

同じ中身ながら、著者が変われば、こうも全体が「様変わり」するものだろうか。訳文自体が原典を超えることは、まず見られないものの、双方がしかし、限りなく接近する事態ならあながち皆無ともいえないだろう。そうした数少ない例外の一つが、ハイエットの英訳にちがいない。今回は、紙数の制約もあって、「僭主たちの文化政策」のみを掲載することにした。

(本学文学部非常勤講師)